

このページでは[大宮南部浄化センター・みぬま見聞館](#)のトピックスを紹介をします。

## ハンゲショウの花の咲くころ（6月に自然庭園で観察できる動植物について）

みぬま見聞館の自然庭園では、日々暖かさが増し、身に着ける服がセミの羽のように薄くなることから、セミの羽の月と書く蟬羽月（せみのはづき）を迎え、あたりも植物たちのしっとりとした緑の香りに包まれるようになりました。

今月は、そんな自然庭園の中で、葉の色を白く染め始めたハンゲショウについて、お話をさせていただきます。

ハンゲショウは、ドクダミ科ハンゲショウ属の多年草で、主に水辺に生え、メチル-n（ノルマル）-ノニルケトンと呼ばれる揮発性物質を主成分とするドクダミに似た独特の香りがします。

埼玉県では、絶滅危惧2類にランクされています。

名前の由来は、半分の半に季節の夏、生命の生と書く半夏生（はんげしょうず）と呼ばれる時期に花を咲かせることからとか、葉の緑色が抜け半分白くなり、おしろいを塗ってお化粧をしているみたいだからなどと言われていて、昔は片白草（かたしろぐさ）とか三白草（さんぱくそう）と呼ばれていたこともあったそうです。

半夏生（はんげしょうず）とは、中国の暦で1年を24個に分割した二十四節気（にじゅうしせつき）を、さらに5日ごとに細かく分けた七十二候（しちじゅうにこう）の一つ一つである雑節（ざっせつ）のうち、夏至から数えて11日目となる7月2日から七夕の7月7日までのハンゲの花が咲く時期のことを指すのだそうです。

ハンゲとは、小さな柄杓の形をした花を咲かせるカラスビシャクとも呼ばれるサトイモ科の植物のことだそうです。

ハンゲショウの花自体は、6月終わりごろから咲き始めるのですが、葉は6月早々に白く変わっていきます。これは虫媒花であるハンゲショウの花が、あまり目立たないので、光合成に必要な葉緑素を、あえて抜いてしまうことで葉をめだたせ、花粉を運んでもらう虫を引き寄せているのではないかとされています。

当然開花時期を終えると、この白色の葉は、見ることができなくなってしまいます。

また、ハンゲショウの開花の時期は、ハンゲの後に農はなしと言われるほど、農作業における重要な節目で、この時期より前に田植えを終わらせることがとても大切だったようです。

実際に三重県では妖怪のハンゲが出るから農作業をするとか、青森県ではこの時期より後に田植えをするとか1日につき1粒ずつ収穫量が減るとか語り継がれているそうです。

面白いことに、この時期には、行事食（ぎょうじしょく）と呼ばれる特別な行事の際に行われる食事の風習が日本各地に残っていて、関西地方ではタコを、福井県では鯖の丸焼きを、長野県では長芋汁やトロロ汁を、奈良県ではお餅を、香川県ではうどんを食するそうです。これは田植えや麦の刈り入れが終わり、その労をねぎらうとともに、夏本番の暑さを乗り越えるための栄養補給の意味があるそうです。

また江戸時代の宿場町の風景を残し、長ネギを箸としてお蕎麦を食べることで有名な福島県の大内宿では、毎年7月2日ごろに後白河天皇（ごしろかわてんのう）の第2皇子である高倉宮以仁王（たかくらのみやもち

ひとおう)を祀る高倉神社の祭礼「大内宿半夏祭り」(おおうちじゅくはんげまつり)が行われるそうです。こちら側室の桜木姫(さくらぎひめ)が最後を迎えた悲劇の舞台ですので興味をそそられますね。妖怪のハンゲは様々な姿で伝えられていますので、ちょっと見てみたい気持ちもあるかもしれませんが、決して花は華やかではないけれど、あたり一面が濃い緑に包まれていく中、葉の半分だけ無垢な白色をまとい、私はここよとアピールして虫たちを集め、したたかに生きている、そんなハンゲシヨウを見に みぬま見聞館の自然庭園を訪れてみてはいかがでしょうか。



ハンゲシヨウの花の咲くころ  
花の周りの葉が白くなっています



ハンゲシヨウ  
花の時期以外、葉は緑色です



ハンゲシヨウの花  
白と緑の葉がキレイです



ハンゲシヨウの花  
花自体はこのように小さくて目立ちません



ネムノキの花  
自然庭園の東門付近でもうすぐ咲くころです



コムラサキの花  
花も実もカワイらしいです



オオムラサキ  
自然庭園でもうすぐ見られるかもしれません



キアゲハ  
羽を閉じても開いてもキレイです



クロアゲハ  
とてもシックな装いです



ルリタテハ  
開いた羽が美しいです



ツマグロヒョウモン  
キレイな模様が身近にみられます



ハラビロカマキリ  
幼体ですが、カマは鋭いです